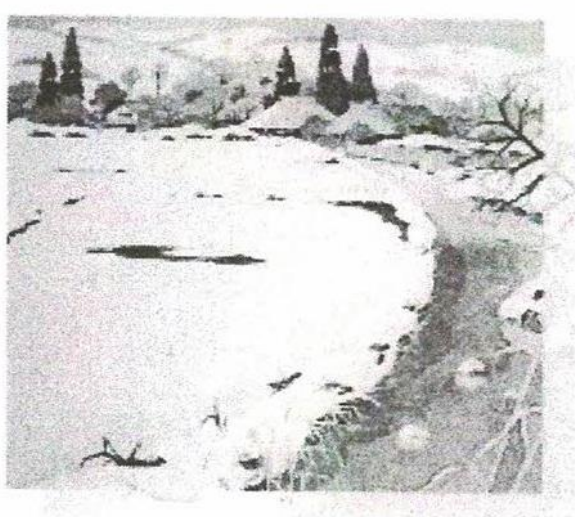
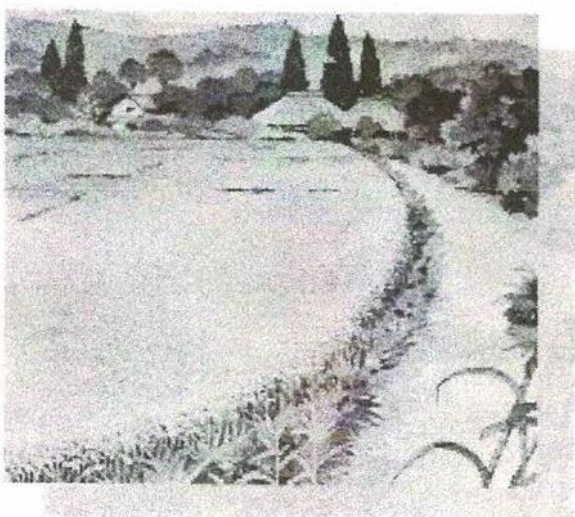
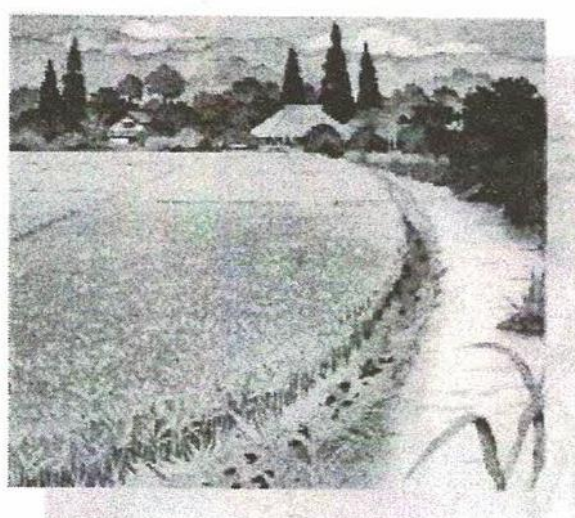
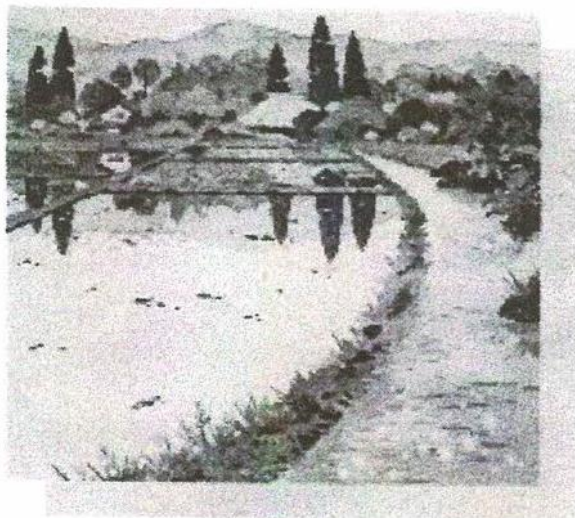


令和4年度 喜多方市
小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 佐川 正人

今年度も市内全小学校十七校、千四百四十四名の児童が小学校農業科に取り組みました。コロナ禍の中ではありましたが、各小学校農業科支援員の皆様を始め、会津農林事務所様、会津よつば農業協同組合様、県立耶麻農業高等学校様、多くの関係機関の皆様のご支援とご協力をいただきましたことに対して心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が全国で猛威を振るう中、変化と潤いのある学校生活を通して、学びの保障を行ってまいりました。コロナ禍の中で、今まで以上に感染症対策を考慮した農業体験が実施され、体験を通して児童が大きく成長したことを、作文に素直な文章で綴られていました。例年とは大きく違った学校生活でしたが、例年と同様の大きな成果があったと安堵しました。

今年度の作文を読み、心に残ったことが二つあります。一つは、「感謝」です。教えていただいた農業科支援員への「感謝」や一緒に作業した友達への「感謝」、いつも料理してくれる家族への「感謝」、育てた農作物への「感謝」、それぞれの視点から多くの感謝が作文に込められていました。今まで当たり前だと思っていたことであって

も、体験を通してそのありがたみを感じることができたのではないのでしょうか。

もう一つは、「変化」です。苦手な作物を育ててみたら食べられるようになったという「変化」や体験を通して友達の良さに改めて気付くことができた「変化」、農業が辛いだけというイメージが喜びに変わる「変化」など、心身の変化をいくつもの作文から感じることができました。その変化を体験できたことで、更なる困難に立ち向かう勇氣になるのではないのでしょうか。

今年度も、市内全小学校十七校の三年生以上の児童が、小学校農業科作文コンクールの学習に取り組みました。紙面の都合上、入賞した四十五点の作品のみの掲載となりますが、農業科作文コンクールに取り組んだ全ての児童に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

結びに、ご多用の中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生始め、研究会での貴重なご意見をいただくとともに、審査においても慎重に審査していただきました審査員の皆様へ感謝を申し上げます。今後もこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。作品集発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

「子ども達の学びから学ぶ」喜多方市小学校農業科」

関東学院大学教授 佐藤 幸也



学校の先生方は子ども達が学ぶ様子を様々な観点から評価します。例えば、算数なら計算のやり方、理科なら実験や観察の仕方とそこからどんなことが考えられるのか、体育なら運動のやり方などです。でもこれは一部に過ぎません。小学校の先生方は教科専門の中学、高校とは少し違い、子どもの全体性（心の中の悩みや喜びなども含め丸ごとの姿）を見つめながら、その子がよりよく輝けるようにするにはどうしたらいいか、という考え方で評価します。そして、実は子どもたちの学びの様子から自分の指導の評価もします。つまり、学習記録として成績を付けるためではなく、先生が子どもたちからどのように学んだのか、という評価でもあるのです。

もう一つ大事なことがあります。子ども達は友達と学びあっているということです。逆上がりの苦手な子が得意な子の動きを見て「そうか!」と気づきやってみると「できた!」が生まれます。子どもたちの学びあいを先生

方は注意深く見ており、それを学級通信や学校便りなどで家族や地域の人々に伝え、子どもの成長を喜びます。

学習評価というものは、誰ができて誰ができないと区別するものではなく、その子なりの成長をお互いの喜び

にする目安にするものです。この考え方を「カルテ」と言います。戦後社会科を作られた上田薫先生が中心とな

る「社会科の初志をつらぬく会」で活用され、全国に広がりました。医師が治療して病状が良くなり、患者が

健康になる喜びを共有するのと同じです。教師は魂の医者です。子どもたちの成長は喜多方の喜びなのです。

これを農業科で考えてみましょう。これまで書かれた子どもたちの作文には「最初あまり農業に興味がなかつ

た」「畑なんてめんどくさい」と言っていた子どもたちが、水やりや草取りなどをしているうちに、豆や米に愛

着が湧き、「田や畑や農業が好きになった」「支援員さんや農家さんを尊敬する」などとあります。この言葉を見

た瞬間、先生方には喜びがあふれてきます。子どもたちが長い時間をかけて体験を重ね、教室内外で支援員さ

んや家族などから教えてもらいながら農業を理解し、好きになったからです。もっと言えば、喜多方の大地や風、

土を豊かにする雨や雪なども大切に思う心が育ち、これらを護っていききたいという認識が育ったからです。

農業科に関する絵や詩、作業しているときの動作や表情、教室や学校外で農業科について考えている子ども

たちの様子から、子ども達の心の中で起こったこと、これから起こるであろうことなども観ています。そして、

地域の皆さんと喜びを共にするや瞬間しゅんかんやその後の成長まで考えながら評価します。数字などで表現ひょうげんできない、最も人間らしい教育の成果を評価するのです。これは「」にはできません。

一方、子どもたちの成長から教師として成長する自分が見えてきます。先生が先生になるのです。当たり前に思うかもしれませんが、教師が一人前になるには子どもたちに学ぶことが大事なのです。そして、ここに信頼しんらいがあり、思いやりがみんなに育ちます。評価のためのみ見るには、見る、視る、診る、看る、観るなど、人間を深く理解する考え方、方法が示されていて、先生方はいつもこれをやっています。これはとても重要なことじゅうようです。作文を読んでいると、子どもたちがどのような場面ばめんで苦悩くのおうし、解決かいけつに努力どりよくし、収穫祭や学習発表しゅうかくさいの場ばで喜びと誇りほこを得たえのかつたが伝わってきます。学び、変わることを私たちは見て、自分も育てられているのですね。

日本では多くの人々が孤立こりつし、不安ふあんだから、心もカネで左右できる、弱い奴はダメなのだと思込こまされています。自己責任じこせきにんとも言います。それは勘違いかんちがいなのです。雑草や害虫ざっそうのように思っていたものが、実は大切なお友達ともだち（コンパニオンプランツ）であることも多くあります。いやだなと思っていたものが自分にとって大事なものに変わることしんらいも多い。つながり、協同することあいじようで人間らしく生きられるのです。そこには信頼や愛情ふかけつが不可欠です。農業科の学びはこれらと子供の成長が一体となっていることとそれを大人が学べることに価値があるのです。

入
賞
作
品

【大賞】

食べ物大切さ

姥堂小学校 六年 戸田 絢乃 1

作物の力

豊川小学校 四年 立川 薫 4

当たり前だけど当たり前じゃなかった

熊倉小学校 五年 齋藤 礼 2

私のごちそう

堂島小学校 三年 関本 桜里姫 5

野菜の気持ち

高郷小学校 五年 佐藤 心彩 3

【優秀賞】

農業は想いをつなぐ

豊川小学校 六年 渡邊 月渚 6

農業科の学習を通して

堂島小学校 六年 岩渕 芽愛 7

今年の野菜作り

高郷小学校 六年 小林 かの 8

米一粒一粒につまった努力

堂島小学校 五年 渡部 明梨 9

きらいな小豆を育ててみたら

第一小学校 四年 高橋 璃玖 10

冬至かぼちゃ

松山小学校 四年 加藤 心美 11

農業科での大切なことは

慶徳小学校 四年 佐々木 来良 12

農業っていいね

熱塩小学校 四年 瓜生 花菜 13

農業科で学んだこと苦ろうして思った事

熊倉小学校 三年 高橋 愛世 14

農ぎよう科学習で学んだこと

塩川小学校 三年 八卷 蒼生 15

【農業科賞】

小学校最後の農業科

第一小学校	六年	石川 蒼大郎	16
農業科のふり返り			
松山小学校	六年	国府 あやめ	17
最後の農業科			
上三宮小学校	六年	上野 結貴	18
お米を育てて			
関柴小学校	六年	小林 詩	19
協力して作り上げた作物の命			
豊川小学校	六年	雪 舞依夢	20
農業科を学んで			
熱塩小学校	六年	吉田 愛翔	21
稲かりリーダーになって			
加納小学校	六年	若菜 蕾暉	22

「いただきます。」を考えて

塩川小学校	六年	佐藤 あかり	23
感謝の気持ちでいただきます			
駒形小学校	六年	木村 月乃	24
すいか作りと支援員さん			
山都小学校	六年	平野 翔大	25
米作りの体験をして学んだこと			
第二小学校	五年	加藤 心和	26
大成功お米作り			
松山小学校	五年	下妻 麻友	27
農業の大変さと大切さとうれしさ			
第三小学校	五年	渡部 怜菜	28
楽しかった米作り			
第三小学校	五年	小林 瑛馬	29
楽しかったお米づくり			
関柴小学校	五年	芳賀沼 和花	30

農業科で学んだこと

第二小学校 四年 齋藤 由翔 31

大成ここの米作り

上三宮小学校 四年 大塚 千聖 32

落花生を育てることのむずかしさ

関柴小学校 四年 栗田 恋衣 33

初めて知った農業

加納小学校 四年 沢井 夢那 34

大豆を育てて

堂島小学校 四年 五十嵐 花笑 35

サツマイモを育てて

塩川小学校 四年 佐藤 真香菜 36

トウモロコシの失ばいから

駒形小学校 四年 物江 烈士 37

感しやの気持ち

駒形小学校 四年 尾崎 晴星 38

農業の楽しさと大変さ

高郷小学校 四年 中島 陽輝 39

わたしたちの大豆

第一小学校 三年 田中 小春 40

がんばった大豆

第一小学校 三年 堀田 悠 41

農ぎよう科しえんいんさんに教えてもらったこと

関柴小学校 三年 鈴木 心美 42

ジャガイモをそだてて

慶徳小学校 三年 大竹 そら 43

カボチャを育てて分かったこと

塩川小学校 三年 小山 耀理 44

大きくなったさつまいも

山都小学校 三年 齋藤 幹柳 45

【大賞】



食べ物大切さ

姥堂小学校 六年 戸田 絢乃

「えっ。農業科やらないの。」

いとこと農業科の話をしているときに、市外の学校では農業科を行っていないと知った。私の学校では当たり前のようにたくさんの野菜を育てているから農業科という科目はこの学校にもあるものだと思っていた。だからとてもおどろいた。私はこの日からずっと、喜多方市の学校はどうして野菜を育てる授業があるのか考えていた。

六年生の総合の授業では、SDGsについて調べた。すると、世界の現状が見えてきた。日本ではあまり食べ物に困っていないけれど、たくさんの国がきに苦しんでいた。しかし、日本はまだ食べられる食べ物を年間で約六百万トンも捨てているのだ。たくさんの人が苦しんでいる中、日

本はこんなことをしているのだと悲しくなった。

今年の農業科では、さつまいもやメロンなどを育てた。一番心に残っているのはメロンだ。初めての収穫にワクワクしていた。でも、いざ食べてみると想像していた味とは違った。きゅうりみたいな味だった。後で調べてみると、メロンは暑くても寒すぎてもあまくならないことがわかった。きつとメロンにとっては暑すぎる気候だったのだろう。もしこのメロンを売り物にするのなら、きつと捨てられてしまうだろう。そう思うとなんだかやるせない気持ちになった。

どうして喜多方市の学校では農業科に取り組むのか。それは、自分で野菜を育てて食べ物の大切さに気が付くためだと思う。私も苦労して野菜を育てて、その野菜を実際に食べることで食べ物のありがたみや大切さを実感することができた。農業科で学んだことがいずれSDGsの達成につながっていくのだと私は思う。そして、喜多方市で農業科を学んだ一人として、食べ物の大切さを多くの人に伝えていきたい。

【大賞】



当たり前だけど当たり前じゃなかった

熊倉小学校 五年 齋藤 礼

「毎日お米が食べられるのは当たり前のこと」無意識のうちにそう感じていた自分がまちがっていたと気づいたのは、今年、農業科と社会科で米作りについて学んでいたからだ。今までの私は、米を作っている人の苦労をあまり分かっていなかった。そのことを思い知ったのは、そろだらけになりながら、こしをかがめて田植えをした時だ。手作業での田植えは、ただ機械に乗っているのとは大ちがいだ。長時間かかっているためこしがいたい。それにどろの中では足を動かすにも力がある。

社会科では「昔と今の米作りのちがい」を学んだ。七十年前と今では作業の仕方が全然ちがう。しかも排水が十分できなかった土地では、収穫量も少ない。今は手作業の苦

労はなくなったが、米作りに欠かせない水の管理のために稲作農家は様々な苦労や工夫をしているのだと知った。どんなに機械化が進んでも、お米を育てるのは大変なことなのだ。

しかし、私のように生産者の苦労を知らないという人は多いのではないだろうか。食事が十分にとれない人がいる一方で、日本は、年に、米の生産量の三倍以上の食品を捨てているそうだ。「食品ロス」は、生産者の苦労をむだにすることにつながる。だから私達は「食品ロス」を減らして生産者の苦労をむだにしないようにしていかなくてはならない。そしてみんなが生産者への感謝の気持ちを忘れないようにしなくてはならないと思った。

今年、米作りを体験し、生産者の苦労や米作りの今昔、食品ロスなど、色々なことを結び付けて考えることができるようになった。そして「毎日お米を食べるのは当たり前なこと」から「毎日お米を食べられるのは本当に幸せです」ということが深く理解できた。自分が生産者の立場に立つことがなければ、気づくことができないままだったと思う。「自分だけがいい」ではなく「自分もみんなもいい」農業について、もっと考えてみたくなった。

【大賞】



野菜の気持ち

高郷小学校 五年 佐藤 心彩

「自分で作った野菜って、なんでおいしいんだろう。最高だね。」

友達と顔を合わせて、思わずこう言った。私達は、農業科支援員さんに教えていただきながら、みんなで小松菜と白菜作りに挑戦した。最初は、ちよつとめんどうだな、どうして野菜作りをするんだろうと思っていた。私の収穫感謝祭の野菜は買ってきてもいいんじゃないかなと考えていた。でも、収穫感謝祭の日に、野菜を洗ったり切ったりして調理をしてみんなで食べてみると、気持ちが変わった。家の野菜よりおいしくてたまらなかった。どうしてだろう、豚汁なんて自分で作ったことはなかったけど、食べたことはあるのに、不思議だな、と思っていた。母に聞いてみた

ら、

「みんなで一生けん命作ったからじゃないの。」と言われた。一年生から四年生まで、一生けん命作っていたのに何も感じなかった。よく分からないまま、ある日、スーパーに買い物に行くとそこにその答えがあった。それは、野菜コーナーに、「この野菜を食べてもらう人とこの野菜の気持ちを考えながら、私達は作っています。」と書いてある大きなカードだった。これだ、とすぐに思った。みんなは一生けん命に作っている気持ちの中に、食べる人のことを考えているのだ、と思えた。私はこのようなことを考えたことはなかったからびっくりしたし、納得した。とてもすつきりとするのができた。来年は、最後の農業科の学習と収穫感謝祭だから、よく考えて心をこめて活動しようと思った。そして、食べ物に感謝する心をもとうとちかった。小松菜や白菜は、虫をとることや水やりに苦労したが、苦労したからこそでき上がった物は、特別においしいものだと分かった。白菜は虫がついてもおいしくなるぞと思っていたのかなと思った。来年は、野菜の気持ちを考えて、全力で野菜作りをしたい。

【大賞】



作物の力

豊川小学校 四年 立川 薫

ぼくは、今年、植えたじゃがいもや大豆や大根が、土がからからになった暑い日も、土がぐちゃぐちゃになった大雨の日も、しっかり生き抜き大きく育ってきたことが、本当にすごいと思いました。

夏が近づいたころ、ぼく達は、草むしりをしに畑に行きました。太陽にてらされて、気温は三十度をこえていました。大豆を植えた所の土は、からからになっていました。

「干からびてしまうんじゃないか。」

と、ぼくは、心配になりました。友達も、

「水やらなくて、大じょう夫かな。」

と話していました。

だけど、数日後、雨がふり出しました。ぼくは、この水

のめぐみで大豆も元気になれそうと考え、安心しました。

ところが、それから雨は大雨となり、ぎやくに何日もふり続きました。教室から畑の方を見ながら、

「大じょう夫かな。きつと、畑はぐちゃぐちゃになってるよ。」

と、みんなで心配になってしまいました。雨が止み畑に行ってみると、くさっているじゃがいもがありました。大雨のせいでした。でも、全めつしたわけではありませんでした。大雨を生き抜いていたじゃがいもは、天気が晴れると、またすくすく成長を続けていきました。

二学期の初め、じゃがいも達をしゅうかくしました。夏休み中のもう暑や大雨を、じゃがいも達は生き抜いていました。ぼく達人間が畑のような自然の中で、もう暑や大雨を生き抜くことは、難しいと思います。今のぼくでは、とても無理です。ぼくは、畑のじゃがいも達には、自然の中で生き抜く強い力があることを知って本当にすごいと思いました。

しゅうかくしたじゃがいもで作ったカレーライスは、とてもおいしくて、ぼくに力をくれました。生き抜いて食べ物となる作物に、ぼくはありがとうと言いたいです。

【大賞】



私のごちそう

堂島小学校 三年 関本 桜里姫

私の家は米農家です。私はずっとそれがいやでした。理由は、お出かけや旅行ができないからです。農業の仕事が始まると、土日でも連休も夏休み中も、ゆつくりと出かけることができません。だから私は、「農家はいやだなあ。」と、小さい頃から思っていました。

でも、農業科の学習で米作りを体験してからは、少しずつ考えが変わってきました。それは、実に自分に自分も米作りを体験することで、農作業の大変さがよく分かったからです。

米作では、たねまきから始まり、田植え、じよ草、いねかり、だっこくと、たくさんの作業がありました。そのどれもが、大切な作業であり、一つでもぬけてしまえば、お

いしいお米には育たないのだと感じました。

私は、家の人達が、毎日田んぼをかんさつし、いねの生長を見守ってくれていたからこそ、毎年おいしい米が食べられるのだと思いました。それからは、農家がいやではなくなりました。今では、農家の仕事が大好きです。

私のおじいちゃん、おばあちゃん、そのまた何代も前のおじいちゃん、おばあちゃん達が一生けん命にたがやしてきた田んぼが大好きです。私は、田んぼに立つと、農業科で学んだ昔ながらの手作業で働く人達の姿を想えます。汗をかきながら、それでもみんな笑顔です。それは、「おいしいお米になあれ。」というみんなの願いだと感じました。私は、昔も今もその願いは同じだと思います。

家の田んぼでも、今年もぶ事にお米がしゅうかくできました。遠い昔から、先ぞのみなさんが苦勞して守り続けてきた田んぼです。汗と苦勞がたくさんつまった田んぼは、毎年お米を実らせながら、私達に大切な命をつないできたのだと感じます。

生まれ育った土地で作られた食べ物は、私にとって一番の栄ようです。そして、どんなに高級な料理にも負けない、一番のごちそうです。私は農業科を学び、「ごちそう様でした。」のあいさつがもっと好きになりました。

【優秀賞】



農業は想いをつなぐ

豊川小学校 六年 渡邊 月渚

「へえ。そうなんだ。」

私は、農業科の学習を通して学んだことがたくさんある。この七ヶ月間、育てる時に、「昔は、すごく大変だったのか。」と思うことが一番多かった。今は機械などで、楽に出来るけれど、昔はこんなに、やることがたくさんあったのだなと感じた。それでも、今まで続けてくることができたのは、作物を食べる人への気持ちが強いからだと思う。私自身も、「これが美味しいお米になるのか。」と思うと自然と楽しい気持ちになった。だから、作物を食べる人への気持ち、農業を続けていく人の一つの力になる。そう思った。

食べる前に「いただきます。」と当たり前のように言っているが、この言葉は作物や野菜、料理を作っている人へ

の感謝の気持ちが、こめられている。あいさつだけでなく、全部食べきることも、作った人へ感謝を伝えられる。食べ終わった後の「ごちそうさまでした。」も、感謝を伝える言葉。この二つの言葉は感謝の気持ちをこめて言うことを、大切にしよう。

いわきに住んでいる私の祖父は、野菜や植物を育てている。広い畑に植えられている柿や育てた野菜などを、毎年たくさん送ってくれる。だから、祖父の家に行った時は手伝えることもある。野菜を育てる時は、水あげが一番大切と教えてもらったこともある。その野菜によつて育て方が違うのが大変だなと思った。米作りでも、お米の種類によつて育て方が違っていて、似ているんだなと思った。

祖父は米作りをやっているわけではないけれど、農業科で学んだことを、今度話してみよう。野菜作りとは違う所、同じ所が見つかるかもしれない。次に祖父の野菜、植物作りを手伝う時には、学校の農業科で学んだことを生かしてみよう。きっと、祖父はほめてくれたり、また新しいことを教えてくれるだろうな。

食べる人への気持ちをこめて、手伝ってみよう。

「立派に育ってね。」

【優秀賞】



農業科の学習を通して

堂島小学校 六年 岩渕 芽愛

農業科の学習をして学んだことが二つあります。

一つ目は、お米や野菜を育てたときの苦労や喜びです。稲作は田植えから始まり、田の除草、稲刈り、脱穀など一つ一つ手作業で行いました。「とうみ」や「足ぶみ脱穀機」「ころばし」などの道具を使って、昔ながらのやり方で行いました。力があるし、その割にはあまり作業が進まないで、昔の人の苦労を感じることができました。そして、野菜作りでは、毎日当番を決めて水やりをしました。大変だなと思うこともありましたが、野菜がどんどん成長していつ、実が大きくなるのが楽しみでがんばることができました。

また、私は六年生なので、下級生のめんどうを見ながらの活動でした。一年生に田植えの仕方を教えると、

「教えてくれてありがとう。」

「次は何をしたらいい？」

と積極的に取り組んでくれました。最後の農業科の活動は、みんなと協力することの楽しさを感じることができてうれしかったです。

二つ目は、農業科の学習で育てた作物についてです。学校の帰り道に田んぼのわきを通りますが、

「この前植えた苗がすごく大きくなったね。」

「もう少しで稲刈りだね。」

と友達と話をすることもありました。その米でつくったものはとてもおいしかったです。また、畑で育てたスイカを夏休みにみんなで集まってスイカ割りをして食べました。みんなで笑いながら食べたスイカはとてもおいしかったです。種や苗から育った作物が大きく成長して、それを私たちがいただくというところに感謝しなければいけないということに気づくことができました。

今年で農業科は最後になります。どの活動も友達と協力しながら楽しく学ぶことができました。農業科で学んだことをこれからも忘れずにいたいなと思いました。

【優秀賞】



今年の野菜作り

高郷小学校 六年 小林 かの

今年の野菜作りの活動は、支援員さんの力を借りず、自分達の力だけでやりとげました。

自分達で育てた野菜の中で一番大変だったのは、「ピーナッツ」です。なぜかという収穫するまでにいろいろな問題が起きたからです。

まず、種をポットにまいて、しばらくたつても、なかなか発芽しませんでした。不思議に思って、ポットの中を掘ってみると、腐っていたり、種がなくなったりしていました。そこで、インターネットを使って、失敗してしまった理由を調べました。すると、気温が低すぎたことや、水をあげすぎたこと、カラスやすずめなどの鳥が食べてしまったことが原因だと分かりました。

私達は、いろいろな対策をして、ピーナッツを守ろうと

思いました。ポットにビニール袋を被せてポットの中の気温を上げたり、鳥よけ用のハトの人形を作って置いたりしました。この対策によって、ピーナッツは無事に発芽して、苗はとても大きく育ちました。

しかし、葉っぱが増えた頃、新しい問題が起きました。それは、葉っぱを虫に食べられてしまったことです。そこで、私達は、虫よけスプレーを作ることになりました。「にんにく」「唐辛子」「ブラックペッパー」「酢」など、とにかく刺激が強いものを混ぜて作りしました。そのスプレーをかけて一週間が過ぎ、見てみると、ほぼ虫に食べられていませんでした。とてもうれしかったです。

その後もみんなで協力をして、たくさんピーナッツを収穫することができました。六年生みんなで育てた野菜は、とてもおいしくて、無事に作ることができて良かったなと思いました。

今年の野菜作りは、問題を解決するためにいろいろな工夫ができ、なにより野菜を作る大変さが、とても良く分かりました。これからも作ってくれる人に感謝して、野菜を食べたいなと思いました。

【優秀賞】



米一粒一粒につまった努力

堂島小学校 五年 渡部 明梨

お米を育てるまで、わたしはあたり前のようにお米を食べていました。田植えが近くなった頃も、そんなにがんばらなくても収穫の時期になれば大体はとれると思っていたしました。

お米を育てた中で、大変だったことが二つあります。

一つ目は、じょ草です。「ころばし」という昔の道具を使って行いました。やったことはあったけれど、今年は去年よりもどろが水つぽくてねちよねちよしていたので、足がうまってやりづらかったです。それに、ころばしにどろがたくさんついてくると、重くなって前に進みづらくなり、とても力が必要になります。最後の仕上げは高学年がやるので、とてもつかれて大変でした。でも、雑草に栄養をもっていけないように、お米が丈夫に育つようにと思います。

がらがんばりました。農業科支援員さんに手伝ってもらったり、教えてもらったりして終わることができました。

二つ目は、だっこくです。じょ草と同じように、「だっこく機」と「とうみ」という昔の道具を使っていました。「足ぶみだっこく機」といって足ぶみすることで動く機械です。六年生が足ぶみをして、三・四・五年生は稲の束をだっこく機にかけました。少しでも力をぬくと、引きこまれてしまうのでとても大変でした。粒がなるべく残らないように、稲の束の向きを変えてだっこく機にかけました。だっこくは片づけも大変でした。ブルーシートに落ちた米の粒をていねいにほうきで集めました。大変だけれど、自分たちが一年間、がんばって育てたお米なので、粒が残らないように集めました。

一年間お米を育てて分かったことは、収穫の時期になったらとれるわけではなく、収穫の時期まで大事に育て続けることでおいしいお米が食べられるということです。また、米一粒一粒にたくさんの方の苦労と手間、努力がつまっていることも分かりました。これらのことを思いうかべながらお米を食べたいです。

【優秀賞】



きらいな小豆を育ててみたら

第一小学校 四年 高橋 璃玖

ぼく達四年生は、農業科で小豆を育てることになった。でも、僕は小豆がきらいだ。きらいなものを育てるのはいやだった。だから最初はあまり乗り気ではなかった。

ところが、小豆の種に名前をつけて植えるときにはワクワクした。僕がつけた小豆の名前は「リーリエ」。黒いポットの途中で約一ヶ月育てた。毎日ベランダに出て水をやり世話をした。僕の「リーリエ」がみんなより少しおくれで芽が出てきたときには、とてもうれしかった。内心、僕の芽はどうして出てこないのだろうと心配していたからだ。

六月には植え替えをした。クワで畑をたがやし、マルチをかける作業は大変だった。それ以上に、夏の暑い日の草むしりも苦勞した。暑くて、もうやめたいという気持ちでいっぱいだったけれど、小豆のためにがんばった。

ぼく達は、小豆を使った料理について調べる「あんコース」、小豆についての知識をふやす「博士コース」、小豆をたくさんしゅうかくするために世話をする「大量しゅうかくコース」の三つのコースに分かれて調べ学習や活動を進めてきた。その中で、ぼくは、「あんコース」として、あんこ作りにチャレンジした。小豆をゆで、さとうや塩を加えてつぶあんにする。こげないようにヘラでよくまぜながら完成させた。食べる前には「やっぱ無理かも」と思ってたけれど、いざ食べてみると小豆がきらいなぼくでも食べることができた。すごくおいしかった。「あんこって意外といけるな」と思った。

小豆を育ててわかったこと。それは、きらいなものでも、自分で育てたら食べられるようになることだ。それに、嫌いな食べ物でも農家さんに感じやしなければならぬという気持ちがわいてきた。もし農家の人が作物を作らなかつたら、ぼく達は食べる物に困ってしまう。だからこそ、好ききらいをしないで何でも食べるようにしたいと思った。来年は米作り。今から楽しみだ。

【優秀賞】



冬至かぼちゃ

松山小学校 四年 加藤 心美

今年の農業科の学習では、小豆とカボチャを育てました。四年生では、農業科で育てた小豆とカボチャで冬至かぼちゃを作ることが決まっていたのでとても楽しみにしていました。

私はカボチャが大好きで、家でもよくお母さんに、カボチャをにってもらったり、天ぷらにしてももらったりして食べるので本当に楽しみでした。

五月に支援員の方々と一緒に苗を植えた時には、どれくらい育つか考えながら行いました。農業科の学習では、作物を育てる大変さや育てた作物を収かくし調理するので、とても勉強になるし、きょう味もわくので大変というよりかはとても楽しい学習です。その中でも一番大変だと思うことは草むしりです。ボウボウに生えた大量の草をむしり

取る作業は、やはり大変でした。

冬至かぼちゃ作り当日は、お手伝いに来てくれた方々と一緒に行いました。小豆は最初に作ってくれていたのですが、私達はカボチャを切る所から始めました。カボチャは皮がかたくて切るのが大変ですが、家でもお母さんと一緒に行っているので自信をもつてやれました。

「上手に切れたね。」

と、お手伝いの方にそう言ってもらえたのがうれしくてたくさんのカボチャをナベに入れ水を少し入れてから小豆を加え、

「おいしくなあれ。」

と、言いながら作りました。と中まぜすぎてカボチャがつぶれてしまいました。が、とてもおいしく仕上がりました。たくさん食べてしまい、その後の給食はほとんど食べられませんでした。

この農業科の学習を通して私は、食べ物大切さや料理する事への興味もわき、料理好きのお母さんと色々な料理を作ることが楽しみの一つになりました。毎年、この農業科の学習を通して多くの事が学べるので、これからたくさんさんの事を学び自分のためにいかせるようにしていきたいと思っています。

【優秀賞】



農業科での大切なことは

慶徳小学校 四年 佐々木 来良

農業科って何？ぼくが小学校に入学してからすぐに、ぼくの姉や兄が話しているのを聞いて不思議に思いました。一、二年生の時は生活科でさつまいもを育てました。三年生になり、農業科でじゃがいもを育てることで、それは田や畑で作物を育てることだと分かりました。

ぼく達は今年、人参を育てることになりました。作物はぼく達だけで育てることが少しむずかしいので、毎年支援員さんが手伝ってくれます。農業科の時にいつもぼくが一番に思ったことは、農業をしているおじいさんおばあさんはみんなとても元気だということです。種まきの時も、草むしりの時も支援員さんは一人でできばきと作業を進めています。特に、収穫の時にすごいなと思ったことがあります。大きくなった人参をぬくのにはぼく達は一人では

ぬけず、友達と協力し合ってぬいたのに、おばあさんは一人でかたんにぬいていたからです。ぼく達小学生より力があつて、すごいなと思いました。

慶徳町のおじいさん、おばあさん達は農業をしている人が多いので、みんな体力があつてとっても元気です。けれども、ぼくは草むしりをしたり、重い水を運んだりしてこしがいたくてつらかったことを思い出しました。農家の人たちはぼく達小学生よりも長い時間作業をしているので、とても大変だなとあらためて実感しました。

だから今、農業の仕事をえらばない若い人が多くなつてしまい、お年寄りばかりの農家になってしまったのだと思います。人参などの農作物が少しずつ育ち、しゅうかくできたときの喜びは最高です。農業科でぼくのように農業の楽しさや喜びが分かることで、大人になったら農業の仕事につきたいな、と考える小学生もふえるのではないかと思います。農業の授業はとても大切だと思います。

【優秀賞】



農業っていいね

熱塩小学校 四年 瓜生 花菜

「おいしいお米になりますように。」

わたしは、こう思いながら田植えをしました。熱塩小学校では、五月に全校生で田植えをしました。わたしは何回も転びそうになってしまいました。上級生や協力員さんが助けてくれたので、転ばずに植えることができました。植え終わった田んぼを見ると、一面緑色になっていて「きれいだなあ。」と思いました。そして、また、「おいしいお米になるといいなあ。」と願いました。

それから六月になると、田んぼの草取りをしました。苗は田植えの時よりも一回り大きくなっていました。苗をたおさないように気をつけて、田車をおしたり引いたりしながら、草をどろの中にうめました。田んぼに草が生えてい

ると、栄養をとられておいしい米にならないので、しっかりと草をうめました。田車が進まず転びそうになると、友達

が、「だいじょうぶ？あとしがんばろう。」

と声をかけてくれてうれしかったです。

九月に稲を観察すると、九十センチメートルになっていておどろきました。よく見ると黄緑色の実もたくさんついていて、「これが米になるのか。」と不思議に思いました。

九月二十七日の稲かりは、豊作だったのでいつもより時間がかかり、とてもつかれましたが、みんなで協力してがんばりました。

十一月の全校集会で校長先生が、

「熱塩小の米が金賞になりました。」

と教えてくれました。わたしは、「やった。願いがとどいたぞ。」とうれしくなりました。ミニしゅう穫祭で食べた新米は、いいにおいがしてとてもおいしかったです。

米作りは、大変なことがたくさんありましたが、みんな

で笑いながら、

「おいしいね。」
と新米を食べると、そんな苦労は忘れてしまいます。農業のいいところは、これだと思います。来年も、みんなと笑って新米を食べることができるようがんばります。

【優秀賞】



農業科で学んだこと苦ろうして思った事

熊倉小学校 三年 高橋 愛世

今年の農業科では、サトイモとサツマイモ、米を育てました。わたしは、サトイモとサツマイモ、米のそれぞれに、育てるには苦ろうしたことがあります。

サトイモを育てるには、とくに、水をあげるのがたいへんでした。そ母に、サトイモは水をたくさんすって育つことを教わりました。だから、わたしは、サトイモにたくさん水をあげることができました。

サツマイモを育てるには、とくに、草むしりがたいへんでした。わたしは、草むしりをするたびに、「めんどくさいなあ」と思うようになりました。しかし、そんな日がつづいても、友だちは「めんどくさい」など一つも言わず、一生けん命に草をむしっていました。そんなずがたを見て、「わたしもがんばろう」という気持ちになりました。

サツマイモについて本で調べると、えいようがたくさんあることを知りました。だから、みんなに、とくにいっぱい食べてほしいという気持ちにもなり、がんばって育てることができました。

米を育てるには、「たいへんそうだな」と思っていました。が、意外とかんたんでした。しかし、「かんたんだな」と思っていると、手をぬいてしまうかもしれないので、かんたんなことでも、一生けん命がんばりました。

こうして、わたしは、どんな野さいにも、「元気に育つてね」という気持ちをもつことができました。

いもに会では、食べてくれた人たちに「このサツマイモ、美味しいね」と言われ、本当にうれしかったです。それに、たくさんの人たちのえ顔が見られてよかったです。そこで、わたしは、農家の人たちのたいへんさを、あらためて思いました。

わたしは、これから、たくさんの人たちのえ顔を見たり、「美味しい」という言葉を聞いたりしたいです。そのために、今後もせい一ぱいど力していきたいと思います。

【優秀賞】



農ぎよう科学習で学んだこと

塩川小学校 三年 八巻 蒼生

今年の六月、ぼくたち三年生は、初めての農ぎよう科でカボチャを植えました。

その日は、ものすごく暑くて、やる気が出ませんでした。虫はいるし、土で手はよごれるし、暑いし、ぼくにとって、いやなことばかりでした。でも、みんなががんばっていたので、ぼくもがんばって植えました。

植え方は、農ぎようしえん員のすが谷さんという方から教えていただきました。

「野さいは、土作りが大切なんだよ。野さいにとってはみんなのふとんと同じだからな。」

まず、さい初に土にマルチをかけました。これは、土がかわかないようにするためだそうです。次に、マルチに穴を開け、カボチャのなえをやさしく植えました。さい後に、

畑一面にワラをかけました。これは、草が生えてこないようにするためだそうです。あんなにいやだと思っていたのに、植え終った時の達成感なものすごかったです。「早く大きくなって、あまいカボチャになあれ。」ぼくは、心からねがいました。

ところが、八月三日、塩川に大雨がふりました。そのせいで、カボチャ畑は、水につかり、ぼくたちが大事に世話をし、大きく育っていたカボチャはくさってしまつたのです。ぜんめつです。

ぼくは、その時思いました。「農ぎようつて何て大変な仕事なんだろう。天こうにこんなにも左右されてしまうのか。せつかく育ててきたのに、たつた一度の大雨で、今までの苦労がすべて水のあわになってしまった。」畑の後かたづけをしながら、くやしくてたまりませんでした。ことなくやしい思いをしながら、農家の人達は、野さいを作っていることに、ぼくは、初めて気付きました。今まで何となく食べていた野さいですが、「これからはのこさず、作ってくれた人に感しやしながら食べたい。」と強く思いました。

小学校最後の農業科

第一小学校 六年 石川 蒼大郎

今年の六年生の農業科の学習では、落花生について学びました。

僕たちは、六月に喜多方市の「おくや」の社長さんに落花生について話をいただきました。僕はもと「おくや」の落花生が大好きで、さらにくわしく落花生のことについて知れたので、落花生を植えて収かくできることがとても楽しになりました。

そして、種植えの日をむかえました。植えるときに驚いたことがあります。それは、種を一つぶずつ植えるのではなく、二つぶずつ植えることです。一つぶだけでは大きく育たないけど、二つぶ植えることで、落花生が大きく、多く育つことを教えてもらいました。落花生は、土の中で育つことも教えてもらって収穫するのがとても楽しになりました。お土産として、落花生の種をいただいたので、自分の家の畑でも早速植えました。

収穫する十月。待ちに待った日が来ました。落花生を植えた畑に行くまでにとってもわくわくした気持ちで行きました。畑に着いたときには、葉がたくさんあり、びっくりし

ました。そのくきを抜いてみると、たくさん落花生が根といっしょについていました。僕は、抜いたしゅん間は、

「こんなにたくさんなっているよ。」

と友達に見せました。すると友達も、

「こっちにもたくさんあるよ。」

と言って、みんなで落花生を見せ合いながら、楽しく収かくすることができました。

僕は、この農業科で落花生の種植えや収かくを体験できたことで、今まで大好きだった落花生についてさらにくわしく学ぶことができてとても良かったです。収かくした落花生は、これから販売する予定です。僕たちが育てた落花生がどうやったらうまく販売できるのか考えています。落花生をたくさん売ること、僕のような落花生が好きな人を喜多方に増やしていきたいと思います。

農業科のふり返り

松山小学校 六年 国府 あやめ

私は、今までのことをふり返りながら題材の例を見た時、「育てた作物」と「作物をいただくこと」という二つのキーワードが目に入りました。この二つのキーワードを中心に農業科の喜びと心に残ったことを書きます。

「作物をいただくこと」について、私はすぐに家のことが頭にうかびました。私の家では近所の人や母の勤め先の人がよく、その人の家で育てた作物をいただいています。本当にありがたいです。作物をいただくと、家では農業の話をしたりします。「今日も沢山もらえてうれしいね。」「そういや、学校の農業ではこういうのを作っているよ。」作物をいただいたことによつて、農業に対する関心がより深くなること。そして、他の人に自分達で育てた作物をわたすことで、その人も農業に対する関心が深くなるでしょう。これがつながれば、農業の輪が広がると私は考えます。

次に、「育てた作物」をふり返ります。私は今まで、大豆や小豆、カボチャとサツマイモなどを育ててきました。最初は、暑いし、めんどくさいな、と思っていました。し

かし、実際にやると、水やりも草むしりも、楽しんで行えました。収穫のとき、大きくなった作物を前に、感動しました。

今年、私たち六年生はサトイモとポップコーンを育てました。植え方や育て方を調べたり、草むしりをした結果、どちらも大きく、りっぱな作物となりました。これだけでは終わりません。その後、ポップコーンやサトイモをかんそうさせたり、調理します。私は今、ポップコーンはしょっぱい味がいいな。など考えながら、農業科支援員のみなさん、二人の先生。そして、クラスのみんなに感謝します。これまでも、これからも、そのときに、作物に、作物を育ててくれた人たちに感謝をこめて、「いただきます。」と「ごちそうさま。」を言いたいと思います。

最後の農業科

上三宮小学校 六年 上野 結貴

「とつたどー!!」

にんじんを持ち上げたしゅんかんの声がそこらじゅうから聞こえてきます。

今年のにんじんは、今までの中で一番いい出来でした。それも一個だけでなく何個も大きいのにんじんがあり、嬉しかったです。

私は、四年生まであまり農業に興味がなく、大きく関わることもありませんでした。作物も、種を植えて、草をむしって、収穫をすればいいんだと、深く考えることはありませんでした。それがこの一年で大きく変わりました。五年生の時は、野菜の出来があまりよくありませんでした。でもそれは、野菜に心をこめていないからだと思い、今年はしっかりと心をこめて育て、草むしりや間引きも真けんに取り組みました。そしたら今までにないほど大きなにんじんが実ってくれました。私は、大きな作物が育った喜びをあまり感じたことがなかったので、とても嬉しかったです。

私は、最後の農業科学習で気づいたことが二つあります。

一つ目は、気持ちです。作物を育てるにも、いやな気持ちでやっていては上手く出来ません。おいしく育ててほしいと思い育てれば、きつと大きく実ってくれます。

二つ目は、感謝です。私たちが食べている食材のほとんどは、作られた物や、命です。食べることがあたりまえだとは思わず、私たちのための食材に「ありがとう」と感謝し、大きな声で「いただきます」と言いたいと思います。小学校最後の農業科で、このような大事なことに気づけてよかったです。このことを忘れずに、話す時に相手の気持ちを考えたり、あたり前のことをあたり前と思わず感謝の気持ちを表したりして、生活していきたいです。

お米を育てて

関柴小学校 六年 小林 詩

「あつ、また残してる。」

夕飯のとき、お父さんがぼくの茶わんを指さして注意する。それは、たった一粒のご飯粒。「一粒くらいいいじゃん。」と、心の中で思いながら、とりあえずその場は食べておく。農業科でお米を育てるまで、こんなことがよくあった。

四月、お米の種植えをした。小さな数ミリ位の種をたくさんまく。そして、五月に田植え。四月にまいた小さな種は、すくすく大きくなり、約二十センチにもなっていた。田植えは、それを手で植える。

「なんでこんな疲れるのに、機械を使わないんだろう。」と、疑問に思い、一緒に作業してくださっていた農業支援員さんに聞いてみた。

「昔の人は、機械なんてなかったから全て手作業だったんだよ。でも、手作業で作った方がおいしいと思うよ。」

と、教えてくれた。ぼくは、その言葉の意味がそのときは、よく理解できなかった。田んぼに入るのも嫌だった。でも、友達と競争しながら田植えをしていたら、だんだん楽しく

なってきた。手作業でやったからこそ、楽しめたのかもしれないと思った。

十月になり、稲刈りをした。稲の穂が、金色に輝き、みんなで植えた稲をみんなで収穫するのが、とてもうれしくてしかたなかった。もう疲れたとか、めんどくさいとかの気持ちも忘れて必死で作業した。

十一月、収穫祭の日。育てたお米がおにぎりになった。そのおにぎりは、今まで食べたおにぎりの百倍おいしかった。農業支援員さんのあの言葉の意味がやっと理解できた気がした。

お米は、弥生時代というずっと昔から貴重な食料だった。そして、その後、年貢としてお金の代わりにもなった大切な米。手作業だからこそ、お米のおいしさに感動し、その一粒の大切さに気づくことができたと思う。

協力して作り上げた作物の命

豊川小学校 六年 雪 舞依夢

私が登下校する時いつも通っていた道の側では、農業科の学習で育てた稲の成長を見ることができました。何もなかった土が、日が経つにつれて緑色へと変化し、収穫する時には、黄色い稲がびっしりと並んでいました。少しずつ成長していく稲の様子を見るのが楽しみでした。

農業科の学習は、力仕事が多くて大変でした。特に除草では、時間もかかったし、大変でした。でも、友達と協力しながら頑張ったので、楽しかったです。一人じゃ大変なことも、誰かと助け合いながら作業することは、すごく大切で、喜びを感じました。

楽しみにしていた稲刈りの日。その日は晴れて、少し暑いと感じました。最初はとても楽しくて、夢中になって刈り進めました。でも、稲刈りはとても大変だし、難しかったので、途中は何度も諦めかけました。今諦めたら、ずっと頑張ってきた力が、むだになってしまうのではないか。どんなに辛くても、必ず最後までやりきろう。という強い気持ちで私にできたのです。

「もつと出来る。」

自分に何度も言い聞かせました。全員で少しずつ作業を進めて、収穫を終えることができました。今まで大変な作業をしてきた分、収穫したときの喜びが大きかったです。今まで頑張つて、ここまでこれでよかったな、と心から思いました。

私は、農業科の学習を通して、作物の大切さに改めて気付くことができました。農業をしているみなさんは、こんなに大変な思いをして、私たちに作物を届けてくれていることに感謝しないといけないと思いました。これから、全ての作物に感謝し、最後まで残さず食べようと思いました。

農業科を学んで

熱塩小学校 六年 吉田 愛翔

ぼくは、農業科で農作物を育てることを体験して、自然の大切さについて学びました。

ぼくの学校では、農薬を使わずに農業をしています。それが当たり前だったのですが、ぼくは、なぜ農薬を使わないのか、ふと、疑問に思いました。「学校では、どうして農薬を使わないのですか」と教頭先生にたずねてみました。すると、「農薬を使うと自然を壊してしまうし、万が一、子どもたちが口にしても具合がわるくならないために使わないんだよ」と教えてもらいました。それを聞いて、農薬を使うと学校のみんなの具合が悪くなるかもしれないし、自然を壊してしまう、だから使わないんだなと強く感じました。

ぼくの家は、兼業農家です。お父さんがお米を作って出荷しています。米づくりの手伝いは少ししたことがあります。農薬を使っているかどうかまで興味がなく、その時は考えもしませんでした。そこで、お父さんにうちでは農薬を使っているのか聞いてみることにしました。すると、うちでは農薬を使っていることが分かりました。その理由

は、稲をよく成長させるためだからとのことでした。たくさんのお米をおいしく作るためには、農薬も一つの方法だということが分かりました。

学校では、畑の土づくりから始めます。ぼくは五年生の時から、たい肥や肥料をまいて土づくりを経験しました。そして、今年もたくさんのお米を収かくし、全校生で新米炊飯をし、おいしく食べました。

ぼくは大人になって、もし米づくりをすることになったとしたら、農業科で学んだ農薬を使わずにお米を育てることを取り入れてみたいと思います。そして、農薬を使わずに育てたお米をたくさんの人においしく食べてもらいたいと思います。また、豊かな自然も守り続けていきたいです。

稲かりリーダーになつて

加納小学校 六年 若菜 蕾暉

「農業のことをいろいろな人にもっと知ってほしい。」

九月の農業科視察訪問で、農林水産副大臣や喜多方市長に、ぼくが一番伝えたかったことだ。場所は、農業科ミュージアム。去年の六年生から、ぼくたち六年生は農業科ミュージアムを引き継いだ。

ぼくは今年、稲刈りリーダーになった。これまでの肥料まきや田植え、除草、生き物調査などの、農業科での活動で学んだことを思い返して、稲かりのめあてを決めた。

「田に落ちている稲もていねいに拾って、大切にしたい。」

農業科視察訪問でのプレ稲かりで、一番最初にこのめあてを発表した。そして、農業科支援員さんから稲かりのコツを教えていただいた。稲の持ち方、かった稲の束ね方。始めは上手くできなかった。でも、何度もていねいに教えていただき、繰り返し練習して、自信がついた。

十月、稲刈りの日。ぼくは、稲かりリーダーとして、五、六年生に声をかけながら、教えていただいた稲かりのコツを、五年生に教えた。こうして、ぼくが学んだことを、五

年生に伝えることができたのがうれしかった。

今度は農業科ミュージアムを五年生に引き継ぐ。ぼくは今年、農業科支援員さんの紹介の展示を作る。ぼくたちのために、作物の作り方や作業のやり方を教えてくださっていることに感謝して作りたい。そして、五年生にも感謝の気持ちをもって、農業のことを伝えていってほしい。

「農業のことをいろいろな人にもっと知ってほしい。」

この思いをもち続け、この先の将来も農業に関わっていきたい。

「いただきます。」を考えて

塩川小学校 六年 佐藤 あかり

「いただきます。」

これは、なにげなく私たちが日常の中で使っている言葉だ。私は、六年生になって大豆を育てることによって、この言葉を改めて感謝をこめて言おうと思った。

先生から渡されたのは小さな種だった。丸くてかわいいと思った。これを育てるんだ。

「大きく育ってね。」

小さな大豆に声をかけて、土でいっぱいになった黒いポットに植え、畑へと向かった。私は、畑のすみに行くとマルチに穴を開けて、土ごと大豆を植えた。

それから、定期的に大豆を見に行った。七ミリメートルだった大豆は、葉をしげらせている。それを見るたび、私はうれしくなった。

ところが、八月の初めに大雨が降った。畑はどろ水でうまった。同じ畑で育てた弟のカボチャは、かれてしまったらしい。あんなに大切に育てた大豆もかれてしまっただろうか。私はとても不安になった。

予定では、今日は収穫の日だ。不安なまま畑に向かうと

そこにあっただのは、元気に育った大豆だった。とても大きくなっていて、さやの中には実が育っていた。私はその様子に安心して、実を収穫していった。大豆はかれた色をして少しチクチクしていた。耳元でゆらすと、コロコロと音がして、豆がちゃんと実っているのが分かる。私たちの育てた大豆はどろにつかってしまっても、ちゃんと育っていたのだ。私はもう一度、よかったと大きく息をついて、胸をなで下ろした。

私たちが、これまで食べてきたものには、たくさんの方の努力が詰まっている。それを農業科の授業を通して実感することができた。食べ物を育ててくれた農家の人、それを私たちに届けてくれるお店の人達、料理を作ってくれる方、みなさんに感謝をこめて今日も、「いただきます。」

感謝の気持ちでいただきます

駒形小学校 六年 木村 月乃

私の学校では、全校生みんなで育てたお米や野菜を使ってカレーライスを作り、収かく祭をします。今年もお米がたくさん収かくできました。じゃがいももさつまいもたくさん収かくできたので、十一月に収かく祭をしました。

農業支援員の方が、

「最初の一口は、収かくした白米だけを口に入れてよくかんでほしい。」

と言われたので、白米を食べてみると、「すごくあまくて、とてもおいしい。」

とうれしい気持ちになりました。そのとき、おいしいお米はあたりまえではなく、農家の人たちやみんなの協力があつたからこそできたと感じました。私はあらためて農業のすばらしさを学びました。

米作りではたくさんの道具を使いました。除草は「ころばし」という道具を使いました。六年生は二連のころばしを使ったので、とても力がある作業でしたが、やりがいを感じました。稲刈りではかまを使い手作業でやりました。

私は、稲を結ぶのがとても苦手で、何回もほどけてたいへ

んでした。稲を結んだあとは天日干しをしました。とても疲れましたが、時間をかけてみんなでしたっかり作業を進めました。終わったときはほっとして、とてもうれしかったです。

たいへんだったけど最後まで作業ができたのは、米作りについてたくさん教えてくださった農業支援員の方々がいたからです。稲を結ぶときに何回も手伝っていただきました。本当に農業支援員の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

二年間米作りを経験して感じたことは、いろんな作物を育てている農家の人の思いです。おいしいお米や野菜をいただけるのは、農家の方々が心をこめて育てているからだと思います。私はこれからも、感謝してお米や野菜をいただきます。

すいか作りと支援員さん

山都小学校 六年 平野 翔大

農業科支援員の谷野さんの家は、ぼくの家の近所だ。谷野さんが作ったスイカは、とても大きく最高にあまい。スーパーで買ったスイカとは比べものにならないくらい抜群においしい。だから今年は谷野さんに教えてもらいながらスイカを作ると知った時には、あのおいしいスイカが食べられるんだ、ととてもワクワクした気分になった。

実際に育ててみると、おどろきと発見の連続だった。まず、スイカの種がとても小さいことにおどろいた。スイカを食べると種がたくさんついているが、その種の大きさよりも小さいと感じた。よく考えると、あんなに小さい種から大きなスイカに成長するなんてすごいことだ。

また、スイカは一度植えたら、十年ぐらいは同じ場所に植えない方がおいしいスイカになるそうだ。「連作」といって、他の野菜でも毎年同じ場所に植えることはしないように気をつけなければいけないことも知った。

ぼくが特に感心したことは「親づる・小づる・孫づる」の存在だ。孫づるをあえて取り除くことでスイカが「弱った」と感じ、あわてて実をつけ子孫を残そうとするそうだ。

何だかスイカにも気持ちや考える力があってももしろい仕組みだなと感じた。スイカはいつたいどの部分で考えているんだろうと不思議な気持ちになった。

今回スイカを育ててみると、いろいろな工夫が必要だということが分かった。谷野さんがおいしいスイカを作り出す秘密も少し分かったような気がした。広いスイカ畑で一本一本でいいいに孫づるを取ったり、除草をしたり、わらをしいたりと、たくさんの手間をかけていることを考えると大変な作業だ。ぼく達が当たり前前に食べている野菜には、見えない所で農家の人達の苦労があることも知った。給食でもたくさん出される喜多方の野菜。心をこめて育ててくれている農家の方々に感謝しながらいただくと思う。

米作りの体験をして学んだこと

第二小学校 五年 加藤 心和

私は、今年初めて米作りに挑戦しました。

まず始めに、種もみまきを体験しました。特に今までふれたことのなかった種もみは、少しぬれていてベトベトしていました。消毒するために水につけておいたためだそうです。種もみにかける土はサラサラしていて、さわりごこちが気持ちよかったです。初めての経験なので、とてもいい思い出になりました。

次に、田植えをしました。これも初めての挑戦でした。田植えは、条板という道具で線を引いて、植えるところを分かりやすくしました。田んぼに入るとヌメヌメしていて足が抜けなくなりそうになったり、ころびそうになりました。植える時には、みんなの足あとで植える線が見えなくて、うまくできなかつたので、今度やる機会があったら、うまくできるようにがんばりたいです。また挑戦できたらいいと思います。

次に、稲かりをしました。手がりでは「かま」を使いました。使ってみると、一回でザクツと切るのはむずかしくて、ノコギリのように切ってしまうことが多かったです。

切った後は、「コンバイン」を使って米とわらに分けました。米の部分が機械に入っていくところを見ることができて、とてもいい体験ができました。来年に向けても、この学習を忘れないようにしたいです。

最後に、とったお米で収穫祭をしました。自分達で作ったお米をたいて、おにぎりをにぎりました。おにぎりと一緒にとん汁も食べて、とてもおいしかったです。自分達で作ったお米だったので、よけいにおいしく感じました。

私は、この米作り体験を通して、自分達が一生けん命育てて収穫して、おいしくいただくということは、とてもいいことだと思いました。そして、この経験は、地産地消の取り組みにもつながっていくので、これからもこの取り組みを増やしていきたいと思っています。

大成功お米作り

松山小学校 五年 下妻 麻友

私は、お米作りを通して一番は、大変だと感じました。なぜなら、田植えをして、草をむしり、風や雨にも負けないおいしいお米に育て、稲かりをして、やっとおいしいお米がいただけるようになるからです。

田植えでは、泥に足を入れて、転びそうにもなり、運動着がよごれるなど、ちいさいころにもどったように感じとても楽しかったです。

観察をするときは、お米ができてきて一粒取ってみると、いつもより小さい粒でしたがお米になっていることを知り、とてもうれしかったです。台風が来ても負けないで、力強く育っていき良かったです。

ついにしゅうかくになりました。草刈りかまで大きく育った稲を「ざくざく」と切っていききました。みんなで協力し、稲をしゅうかくできました。

お米を調理しました。始めに、お米を水でとぎました。「ぐつぐつ」と音もしてきました。ついに完成しました。多くのみんなで協力し、おいしいお米が作れ、おいしく食べることができました。私は、炊飯器でしか作ったことが

なかったのでもいい経験になったと思います。

このようなお米作り体験を通し、工程などが大変だけど、苦労した分おいしいお米が作れると考えました。私は、お米作りが初めてで分からない事が多かったけど、教えてもらいながらできました。田植えでは転びそうになりながらもがんばり、稲かりは、気持ちがいい音も聞け、とても良かったです。とてもいい経験になりました。

農業の大変さと大切さとうれしさ

第三小学校 五年 渡部 怜菜

私が米作りで大変だったのは、田植えと稲刈りです。農業は腰がいたくなる作業が多くて大変だなと思いました。田植えは苗を二、三本取って指の第二関節ぐらいまで植えます。稲刈りは上の方を強くにぎってカマを引くように下の方を刈ります。腰は中腰ぐらいで作業をしていたのでとても大変でした。田植えや稲刈りをする時は暑くてやりたくなかったけど、みんなががんばっていたので自分もがんばろうと思ってやりました。田植えのときのように、みんなではげまし合いました。みんなではげまし合ったので、田植えはすぐに終わりました。

そして、稲刈りの時期になつて稲刈りをする時、農家の方に、

「収穫する時は、稲の上の方を持ってカマで下の方を引く様に切ります。」

と稲刈りの仕方を教えてもらいました。

私は教えてもらったようにやってみました。けれども、思ったようにうまくはいきませんでした。でも、私はあきらめないで、引くように練習をしながら稲刈りをしていた

ら、できるようになりとてもうれしかったです。稲刈りが終わった後は、刈った稲を農家の人に渡すという作業をしました。

全て終わった後、みんなで楽しかったことを話していました。友達はとてもうれしそうな顔をしていました。私も友達の気持ちが分かりました。苗から稲になるまで沢山の月日経っているから、自分たちで育てたお米が出来たと思うと、とてもうれしかったです。

学習発表会の劇では、

「お米のことをたくさん伝えよう。」

と、発表しました。私は学習発表会で発表するために、資料を集めていると、お米を作るには、年中無休で仕事があることが分かりました。全国の農家さんたちはすごいなと思いました。

私は、お米を大切に食べようと思います。

楽しかった米作り

第三小学校 五年 小林 瑛馬

僕は、今年になって初めて米作りの大変さを知りました。四年生のときは、

「またごはんを食べなきゃなのか。」

と言っていたけれど、今は、

「なんでそんなことを言ってしまったんだろう。」

と後かいしています。今年、米作りをしました。そのなかで、とてもおもしろかったことと初めて知っておどろいたことがあります。

一つ目は、田植えで田んぼの中に入って、稲を二、三本とって田んぼの線にそって植えたことです。僕は、てきとうに植えていると思っていましたが、線にそっているということが分かったのでおどろきました。

二つ目は、稲刈りを体験し、思った以上にくきが固かったことです。でも、少しなれると、「ストン。」

と切れて、気持ちがよくておもしろかったです。やっぱりコンバインの方が速かったです。

三つ目は、米作りは、約一年かかることです。一年もか

かると聞いて、僕が家で遊んだり、ゲームをしたりする時間にも、農家の人たちはがんばって米作りをしていると分
かり、すごいと思いました。僕はおじいちゃんになったら、
米作りや農業をやってみたいなと思いました。

これからも、米を残さず食べて元気を出して、スポーツ
もがんばっていききたいです。農業はとて大変だったし、
残すと作ってくれている人に失礼だなと思うので、残さず
食べていきたいです。

楽しかったお米づくり

関柴小学校 五年 芳賀沼 和花

私が総合の農業科で学んだことや、楽しかったことを、
しょうかいします。まず種まきを四月にしました。小さな
種を、一つぶ、一つぶていねいに、植えました。この小さ
な種がどのくらい大きくなるのかなと不思議でした。五月
には、田植えをしました。種まきもむずかしかったけど、
田植えは、もっともつとむずかしかったです。冷たいどろ
に、足を入れ何度もころびそうになったりしたけど、楽し
く田植えをすることができました。十月には、稲刈りをし
ました。稲刈りもむずかしかったです。かまで一かぶ一か
ぶていねいに刈りました。そのあと農業支援員さんのコン
バインで、だっこくをしました。稲をしゃがんで刈ってい
くのもたいへんだったけど、たくさん刈った稲をコンバ
インに入れることも大変でした。昔の人は、田植えから稲刈
りまで、全て手作業だったのですごく大変だったことが分
かりました。

田植えから稲刈りまでの間に、たくさんのお観察に行きま
した。五月から稲を刈るちよくぜんの十月まで、毎月一度
は、観察しに行きました。毎回毎回観察しに行くたび、成

長していました。青緑だったのが九月ごろには、黄色ぼく
なり最初に植えたときには二十センチメートルぐらいだっ
たのが稲刈りの前には一メートル十センチメートルぐらい
になりました。どんどん大きくなっていきすごくうれしか
ったです。

ここまでの種まきや田植え、稲刈りができたのは、農業
支援員さんが手伝ってくれたからだと思っています。

初めての稲刈りや田植えで、何をやらなければならないのかよく
分からなかったけど農業支援員さんが一つ一つ丁寧に教え
てくれ、何をやらなければならないのか考えてやることができま
した。五年生で初めてやったお米作りはまたあと一年ありま
す。六年生のときは、五年生で学んだことを生かし、六年
生の時にまたちがうことを学んでいきたいです。

農業科で学んだこと

第二小学校 四年 齋藤 由翔

僕たち四年生は、今年の農業科でジャガイモ、ニンジン、カボチャを育てました。春の種まきから始めて、草むしりや水やりをくり返して九月になり、ようやくしゅうかくすることができました。僕はこの農業科の学習を通して、三つのことを学びました。

一つ目は、作物を育てるためには、色々な作業を積み重ねていく努力が必要だということがわかりました。特に、一番大変だったのは、夏休み明けの草むしりです。ざっ草だらけの畑を見て、「これを全部ぬくのか！」と思い、最初はやる気が出なかったけれど、たくさん実ってほしいという気持ちから、少しずつやる気が出てきました。とても暑くて、あせだくになってつかれたけれど、きれいになった畑を見たら、がんばって良かったなと感じました。

二つ目は、みんなで協力することの大切さを知りました。当番せいで、水やりをしたり、全員で広いはんいの草むしりをしたり、一人ではできないこともみんなで力を合わせるとできました。また、しゅうかくした野菜を使った調理実習でも、みんなで協力して美味しいカレーとシチューを

作ることができました。この経験をこれからの学校生活に活かしていきたいです。

三つ目は、今まで以上に食べ物への感謝の気持ちをもつことができました。今回、ジャガイモがうまく育たずにしゅうかくできなかったり、しゅうかくしたニンジンがとても小さかったり、作物を育てることは簡単ではないとわかったからです。これから好ききらいをしないで、味わって食事を楽しんでいきたいです。

僕は農業科の学習を通して、しゅうかくの楽しさだけでなく、様々なことを学ぶことができました。来年こそは、大成こうを目指してがんばりたいです。

大成ここの米作り

上三宮小学校 四年 大塚 千聖

ぼくは、去年のことを思い出します。去年は、米が少し少なかったと思いました。だから今年は、米がたくさんできるように、みんなで力を合わせてがんばろうと思いました。

田植えの日が来ました。みんなで半そで半ズボンになって、農業科支えん員さんといっしょに、田んぼの中にはだしで入っていました。足を土の中に入れた時、ぼくは、

「土の中、つめたい。」

と言いました。みんなも、

「たしかにそうだね。」

と言いました。つめたいのをがまんして、支えん員さんに植え方を教えてもらいながら、いっしょにやっていました。すると、だんだんなれてきて、つめたさを感じることなく植えることができました。

もう少しで終わりに近づいてきました。自分が持っているなえがなくなった時にぼくは、

「なえください。」

と、大きな声で支えん員さんに言って、なえをもらいまし

た。足やこしが痛くなってきたけど、最後までがんばってやり、なえ植えが終わりました。

次の日からぼくは、登校中に田んぼを見ていました。ちゃんと成長しているかな、と心の中で思いました。

五カ月ぐらいたって、いねかりになりました。田んぼには、いねが大きく成長していました。支えん員さんにかり方を教えてもらいながら、みんなでいねをかり始めました。かったいねを、たばねてひもで結ぶ作業もやりました。かったいねは、学校の鉄棒にほしました。

十日ほどたって、だっこくの日が来ました。今年はコンバインでやったので、あつという間に終わりました。

とれたお米は、学級の人みんなでやとと持てるくらい重かったです。去年よりもたくさんとれたし、味もおいしかったです。今年の米作りは、大成ここのでした。

落花生を育てることのむずかしさ

関柴小学校 四年 栗田 恋衣

三年生の時は、大豆。そして、四年生になったので、わたしは落花生を育てることにとでもわくわくしていました。落花生を育てたことがあるお姉ちゃんに聞いてみたら、

「とっても楽しかったよ。」

と言っていたからです。いろいろ聞いていたけれど、それでも落花生を育てるのは初めてなので知らないことばかりでした。例えば、他の野菜と同じように畑に種を植えて作るのだと思っていました。しかし、

「最初にポットに種を植え、芽出しをしてから畑に植えるよ。」

と、先生から言われてびっくりしました。どうしてかな、と思っていたら去年は畑に種をまいてもなかなか芽が出なかったからだそうです。何かに食べられてしまったそうです。毎年同じことをするのはなく、失敗をくりかえさないように考えて育てるのだなあと思いました。

他にもうまくいかないことがたくさんありました。わたしたちは、教室のベランダで水をあげながら芽が出るのを待っていました。ある日、農業支えん員さんが様子を見る

来て、

「ちよつと日光が足りないな。」

と言つて、家に持ち帰つて芽出しをしてくれました。わたしただけでは気づくことができませんでした。また、畑には鳥よけのテープやあみをかけてくれました。ざつ草もふえてきました。栄養がざつ草にいつてしまうので、みんなで暑い中、虫と戦いながら草むしりをしました。そうやってみんなと支えん員さんと協力することたくさん収めくすることができたのです。「野菜を育てるって、やっぱりたいへんだなあ。」と野菜を育てることのむずかしさを改めて実感しました。でも、それ以上に、しゅうかくした後の達成感とみんなで味わったあまくてこうばしい落花生の味は、やっぱりわすれられません。「育ててよかったなあ。」と思える農業科の体験は、わたしにとって最高の宝物になりました。

初めて知った農業

加納小学校 四年 沢井 夢那

今年も、去年と同じくじゃがいもを育てました。そのじ

やがいもで「じゃがいも加納小マーケット」を開きました。目的は、瓜生岩子刀自顕彰会に寄付することです。マーケットのじゅんぴはとても急がしく大変でした。はん売する夢の森にせん伝しに行ったり、私は会計係なので、お金を入れる箱を作ったり、「一ふくろ百十円」ですよというかん板や、レシートを作ったりしました。マーケットを開く前には、副大臣や喜多方市長さんにも買っていたかどうかできました。

マーケット当日、私の家では、じいちゃんが買いに来てくれました。そのじゃがいもはみそ汁にして食べました。そしたら、お母さんやおばあちゃんが、

「夢那の味がする。」

「けっこうまいぞ。」

など、いろいろ話してくれました。その時に分かりました。野菜を育て売っている人は、食べてくれる人にえ顔になってほしいと思っているのだと。

私の家のじいちゃんとおばあちゃんも、学校の給食に野菜

を出しています。それは、学校のみんながえ顔で

「おいしい、おいしい」

と、言って食べてくれるのがうれしいから、大切に野菜を育てているのだと思います。

「今日は、学校に、にんじんを出すんだ。」と、おばあちゃんが言っているのを聞くと、私もうれしくなります。学校みんなに、じいちゃんとおばあちゃんが育てた野菜を食べてもらいたいからです。

今、学校では、三・四年生が野菜、五・六年生は米を育てています。これからまだまだ手間のかかる作業がありますが、みんながえ顔で食べれる、おいしい野菜を大切にしてくれるよう、がんばっていきこうと思います。

大豆を育てて

堂島小学校 四年 五十嵐 花笑

わたしはふだん、なっ豆や豆ふ、しょうゆやみそなどをおいしいなあとなに気なく食べていました。でも、わたしが想ぞうしていたよりも、たくさんの苦労が必要な事から大豆を育ててみて分かりました。

まず、六月に種まきをしました。種は、ビーズのように小さくて、五ミリメートルほどでした。わたしは、なえを植えるのかと思っていたので、種をまくと聞いた時にはびっくりしました。一つぶ一つぶていねいに種を畑にまいて土をやさしくかけました。それから、毎日水やりをしました。大きくなれ、早く芽が出ろと思いながら、水やりを続けました。すると、小さくてかわいい芽ができました。わたしは芽を見て、毎日水やりをしたかいがあったなと思いました。

それから、何回も草むしりをしました。大豆にからまつていて草はぬけにくかったけれど、大豆が大きくなるためには、草はじゃまなので、がんばって草むしりを続けました。草がなくなつたので、栄養をたくさんとれそうだと思います。

そしていよいよよしゅうかくの時が来ました。種をまいてから四か月がたちました。わたしは、あんなに小さかった種から、芽が出て、くきがのびて、わたしの指三本分くらいの太さになっていた事におどろき、その成長に感動しました。ぬく時には、かたくてぬけにくかったけれど、シャベルを使って根ごとひきぬきました。全部で一輪車三台分もしゅうかくできました。鉄のぼうに一本一本ほしていきしました。落ちているさやや豆つぶも、一つぶのこらず拾いました。これから、この大豆で豆ふを作るのが楽しみです。このように、一年通して大豆作りを体験することで、その大変さを味わいました。これからは、大豆からからできているなっ豆や豆ふなどをなに気なく食べるのではなく、作ってくれた人に対してありがたみを持ちたいと思います。そして味わって食べたいです。

サツマイモを育てて

塩川小学校 四年 佐藤 真香菜

「えっ、これがサツマイモの苗なの。」

わたしはおどろいて、思わず声を出しそうになりました。畑で苗を植える日にわたしが見たのは、細くてひよろひよろしていて、今にも折れてしまいそうな苗でした。植えながら友達と、

「これ、ちゃんと育つのかなあ。」

と話していました。この、小さくて細い苗から、太くて大きなサツマイモができるなんて不思議だと思いました。

次の日から、みんなで当番を決めて、畑に水をあげにきました。わたしが当番の日に畑に行くと、苗は細いままだったけれど、土からむくつと起きています。わたしは、赤ちゃんが立とうとしているような感じがして、応えんしたくなりました。教室にもどつてから、友達に、

「今日、苗がちよつと立っていたよ。」

と教えてあげました。

夏休みの前と後には、みんなで畑の草むしりもしました。サツマイモの育ち方もすごかったけれど、雑草の育ち方も同じくらいすごくて、畑の通り道が見えないくらいになっ

ていました。暑い日でしたが、みんながんばって雑草を取りました。運動着が汗でぐしょぐしょになるまで雑草を取り、畑はきれいになりました。

いよいよ収穫の日、土をほってみると、思っていたよりずっと大きくて、でこぼこしたサツマイモが出てきました。あんなに細かった苗から、こんなに大きなサツマイモに育つなんて、本当に自然はすごいんだなあと感じました。むちゅうになつて、たくさん収穫しました。

収穫したサツマイモは、給食の先生にふかしていただき、みんなでおいしく食べました。畑がわたし達にプレゼントしてくれたごちそうは、とても元気の出る味がしました。

トウモロコシの失ばいから

駒形小学校 四年 物江 烈士

今年も農業科で何を育てるか、学級で話し合いました。

昨年はトウモロコシを植えましたが、失ばいしてしまい食べるができずくやしい思いをしました。だから今年もリベンジすることになりました。

昨年失ばいしてしまった理由は、トウモロコシのくきが折れてしるがでてしまい、栄養を虫にすわれてしまったからでした。だから今年は、タブレットで調べてから育てました。

昨年のようにトウモロコシがたおれないように、トウモロコシを植える土を昨年のようにうねの形にしないで、台形のようにして、トウモロコシが根をはれるようにしました。そして、支柱を立てトウモロコシを結びました。また、水をあげる量やひ料をあげる量を調べ上手に育てられるようにしました。今年はしっかり調べて対さくをしたので、ぼくは今年こそは大丈夫だろうと思いました。

しかし、夏休みが終わり水をあげにいくとトウモロコシがたおされ、できていた実が食べられ、周りに落ちていました。ぼくはそれを見て、また失ばいしたとがっかりしま

した。そして、カラスが周りに飛び回っていたのでカラスにやられたのだと思いました。

それからタブレットで、どの動物に食べられたのかと調べました。すると、トウモロコシをたおして食べる動物のほとんどが、タヌキやハクビシンなどの夜行性の動物でした。

夜行性の動物には、オオカミのようや青色のLEDライトがきくとありました。しかし、オオカミのようはかん単には手に入らないし、青色のLEDライトは一週間しかききません。電気さくが一番だとありましたがかん単にはできません。

昨年はトウモロコシのくきが折れ、今年は動物に食べられてしまいました。だからこれからもっと調べて別の方法を考え、自分たちができる対さくを行いたいと思います。そして来年こそは、自分たちの手で育てたトウモロコシを食べたいです。

感しやの気持ち

駒形小学校 四年 尾崎 晴星

農業科で一番心に残っていることは、スイカ割りをしたことです。そして、そのスイカは農業科支えん員の一人であるぼくのおじいちゃんが育ててくれたスイカでした。

今年は四年生でスイカを植えました。ぼくはスイカを作るのは初めてだったので、自分たちで作ったスイカを食べたいと思いました。

スイカを植えてから、スイカのなえに水をあげようと近づくと、スイカのなえがなくなっていることに気が付きました。かれてしまったのかとがっかりしました。

その後六月になり、畑に行くとききわらの上にスイカのなえがありました。ぼくはなんでかれたはずのスイカがあるんだろうと、びつくりしました。

後から、おじいちゃんがだめになったスイカの代わりに、新しいスイカを育てていてくれたことを知りました。おじいちゃんに話を聞くと、みんなでうえたスイカのなえは風で接ぎ木との接ぎ目が折れてしまいかれたこと。おじいちゃんがスイカの種からなえを育て植えてくれたこと。朝四時半から草むしりなどをしていていたことを教えてもら

いました。

ぼくがねている間に、おじいちゃんは一人で大変な作業をしてくれていたことを知りました。みんなにスイカを食べさせてあげたいという気持ちだけでここまでしてくれ、とても感しやの気持ちでいっぱいになりました。

スイカ割りをした後、おじいちゃんにみんなが喜んだことや、スイカが甘くておいしかったことを伝え、

「ありがとう。」

と言いました。するとおじいちゃんがとてもうれしそうな顔をしました。それを見てぼくは人からしてもらったことに対して、心から感しやをすることが大切だと気づきました。

これからは、ふ段の生活で、ちよつとしたことでも、自分がしてもらったことに対して、感しやの気持ちを持ち生活していきたいです。

農業の楽しさと大変さ

高郷小学校 四年 中島 陽輝

ぼくたちは、じゃがいも、さといも、ブロッコリーを育てました。その中でも特に心にのこったのがさといもです。なぜかというときといものは家の畑で育てたことがなく、今年の農業科で知ったことがたくさんあったからです。

農業科をやる前は、農業は楽しいものだ、そう思っていました。ですが、種まきやその後の草むしりをしていくときに「楽しい」から「大変」に変わっているような気がしました。その日から毎日毎日欠かさず水やりをしました。そして楽しい気持ちもなくなっていきました。

種まきから一か月くらいがたってさといもも大きくなったころ、夏休みに入りました。夏休みになって、ぼくたちはさといもに水をあげなくなったので、

「さといもはかれていないかな」「ちゃんと育っているかな」

と、とても心配になりました。でも、不思議なことに、夏休みのプール学習をしに学校に行くとなんとさといもが大きく育っていて、草がほとんどなかったのです。

夏休みが終わり、新学期が始まりました。ぼくはなぜさ

といもが育っていたのかを先生に聞いてみると、

「夏休みの間はしえん員さんがさといもに水をあげていたんだよ」

と言っていました。ぼくはそのときから、「楽しい」「や」「大変」、そのような気持ちではなく、「大切に育てよう」この気持ちで水やりや草むしりをしました。

十月の終わり、ついにさといもをしゅうかくする日がやってきました。ぼくはさといもにきずをつけないようにしんちょうにぬきました。すると大きなさといもがたくさん出てきました。いままでのど力がむくわれたんだなと思いました。来年も「大切に育てよう」という気持ちをわすれずに農業科に取り組みたいです。

わたしたちの大豆

第一小学校 三年 田中 小春

わたしが農業科の学習で一番心に残ったのは、豆が成長していくところです。

五月の下じゅんに豆まきをして、それから水やりや草むしりに取り組みました。しばらくして種から子葉が出てきました。どんな花がさくのか、待ち遠しくなりました。早く大きく育ってほしいと心から思いました。

そして二週間がたつと、二まい目の葉が出ていました。わたしはますますワクワクしました。三まい目、四まい目と葉がふえていきます。総合の学習で畑をかん察しました。すると、葉が虫に食われていました。でもそこにはえだ豆が出てきていました。わたしは、

「どうやって大豆になるのかな。」

と不思議に思いました。それからどんどん葉がかれていきました。わたしはすっかり育つのかなと心配になりました。そしてついに、大豆がきれいに実っていました。

「よかった。」

わたしはうれしくなりました。

そして、十月上じゅん、大豆のしゅうかくをしました。

くきを持って力いっぱい引きぬきます。くきがかたくてぬくのがむずかしかったけど、友達と協力してなんとかぬくことができました。

十一月上じゅんに豆ぶちをしました。昔からでんとうてきなやり方だそうです。大豆を地面にたたきつけてさやの中の豆を取り出します。取った大豆はかたくてつるつるでした。

最後に調理です。わたしの学年は、大豆の甘からいためを作りました。いためる時、少しハラハラしました。でも楽しかったです。完せいし、食べました。味はうすかったです。でも、みんなで育てて作った大豆なので、とてもおいしかったです。

この農業科の学習で、友達との仲が深まったり、自分たちで育てた物を自分たちで調理して食べたりさまざまな体験ができたと思います。そしてこれからも食べ物大切にしたいと思います。

がんばった大豆

第一小学校 三年 堀田 悠

はじめての農業科で、大豆を育てると聞いて、心をこめて育てようと思いました。

五月十六日。しえんいんの畑の先生といっしょにたねまきをしました。マルチという黒いシートをつけました。黒いと太陽のねつをきゆうしゆうするそうです。それに、

「百二十日たたないと実がならないよ。」

と聞いてそんなにと目を丸くしました。ぼくは、何かを育てるのが大すきだけど、さいしょのたねまきも楽しかったけど、毎日本水をあげるのはむずかしかったです。ぼくたちの畑は、水道がない校庭のすみにあるのです。それに、ざっ草がどんどん生えてくるので草むしりもたいへんでした。一か月たつと、葉っぱがたくさん出てきました。ホウセンカとちがつてまん中の所がのびてから生えているとわかりました。葉っぱの表はつるつるだけど、うらはちくちくしました。二十三まいもあつてすくすく育ってくれてうれしかったです。八月三十一日。えだ豆の進化形を十こいじょうも発見しました。えだ豆は大豆だったのです。十月十八日。大豆のしゅうかくはむずかしいとわかりました。

でつかくて大豆がいっぱいなって重すぎてとろうとしてもとれないのです。先生の手もかりました。十一月十七日、みんなで豆ぶちをしました。よく見たらミイラみたいにひからびていました。たたくとパンパン音がしていっぱい大豆が出てきました。すぐくおもしろかったです。次の日、みんなで大豆のあまからいためを作りました。大豆はきのうより水をすってちよつとだけ大きくなりました。しゅんぜい君がすぐくうまかったのでコツを聞いたたら、

「大豆を動かしながらやるといいよ。」

と教えてくれました。食べてみたらしょうゆがよくきいていてとってもおいしかったです。

大豆は実だけだねでなるのがふしぎです。丸くてちつぽけなたねがすぐでかくなつてたくさんの実ができました。みんなで育ててくろうしたかいがあつたなと思いました。

農ぎよう科しえんいんさんに教えてもらったこと

関柴小学校 三年 鈴木 心美

わたしたち三年生は、農ぎよう科の学習をはじめて行いました。三年生は、大豆を植えました。

五月にたねを植えました。わたしははじめて植えたので、農ぎよう科しえんいんさんに聞いてはじめて知ったことが二つあります。一つ目は木のぼうを使って土にあなをあけることです。木のぼうを使うと指であけるよりもたねを植えるのにちょうどいいあながあきました。二つ目は、たくさんのお水をあげることです。花を育てる時よりもずい分多くの水をあげると聞いて、とてもおどろきました。農ぎよう科しえんいんさんにさまざまなことを聞きながら、なんとか植えることができました。どのように育つのか、わくわくしました。

七月には、学校の畑に植えかえたなえを見に行きました。わたしが想像していたものよりもずっと大きくなっていて、とてもおどろきました。きっと、農ぎよう科しえんいんさんがわたしたちの知らない間に、大豆の手入れをがんばってしてくれたんだと思いました。

ついに、十月にしゅうかくの時期になりました。わたしたちは「つるの子」と「ひでん」の二しゅるいを植えました。まずは、緑色のひでんをしゅうかくしました。少し早めにしゅうかくしたので、えだ豆として食べました。みんなで食べるえだ豆は、とてもおいしかったです。

さらに、十一月にはつるの子をしゅうかくしました。ひでんとは、ちがって、わたしがいつも見ている色の大豆ができました。この大豆は、しゅうかく祭で石うすでひいてきなこにしました。さとうをまぜたきなこはとてもあまくて、おいしかったです。

来年は、落花生を育てます。大豆よりも育てるのがむずかしいですが、今年、農ぎよう科しえんいんさんに教えてもらったことをわすれずに育てたいです。ピーナツクリームにして食べるのが楽しみです。

ジャガイモをそだてて

慶徳小学校 三年 大竹 そら

わたしは、農業科でジャガイモを育てました。

五月六日に、ジャガイモを半分に切ったものを畑の土にならべました。ジャガイモのたねってどんなたねかなと思っていたら、いつも食べているジャガイモだったのでふしぎだなと思いました。

ジャガイモの畑は、わたしがまい日学校に来るときに通る道なので、友だちと、

「いつになったらめが出るのかな。」

「まだ、めが出ないね。」

と、話しながら見ていました。

三週間たって、めが出ました。みんなで見に行って、葉っぱの大きさはかったら三センチメートル五ミリメートルありました。

六月には、花がさきました。うすむらさきの花でした。小さな花があつまっていて、思っていた花とはちがっていたのでびっくりしました。見るたびに、葉っぱやくきがすくすくそだっていてうれしくなりました。

ジャガイモは、土の中でどんなになっているのかわくわくしました。

七月、いよいよいもほりです。一本ぬくとたくさんのもがつかってきました。手で土をほると大きいのもたくさんできました。

半分に切った、七十このたねいもから、四百こぐらいのジャガイモがしゅうかくできてすごいなと思いました。

しゅうかくしたジャガイモでカレーを作って食べました。おいしいなと思ったら、

「そらたちが作ったジャガイモだよ。」

と言われ、家ぞくも

「このジャガイモ、すごくおいしいね。」

と言ってくれたのでとてもうれしかったです。

やさいを作るのは、すごく大へんだったけど、できた時にはそのぶんおいしくかんじるんだなと思いました。

カボチャを育てて分かったこと

塩川小学校 三年 小山 耀理

ぼくは、農業科の授業でカボチャを育てました。その中で、分かったことが三つあります。

一つ目は、野さいを植えるのは、かんたんそうに見えるけれど、やってみるとむずかしいということです。さいしよ、カボチャを育てると決まったときは、たねを土にうめて、水をかけていれば育つと思っていました。けれど、ぼくのそうぞうとはまったくちがっていました。まず、マルチという黒いシートをかけるという作業があります。マルチをかけると土のはね返りを防止してくれます。次に、大きなわらをかぶせる作業があります。農業しえん員のすがやさんが

「わらははざっそうを生えさせないようにかぶせているんだよ。」

と、わらをかぶせる理由を教えてくださいました。ぼくはそのときわらのひつようさいはあまり知りませんでした。わらはこんな使い方があるんだなと思いました。

二つ目に分かったことは、野さいはかんたんにだめになつてしまうことです。まず、きちんと手入れや水をやらな

いとかれてしまいます。でも、水をあげすぎてもだめということが分かりました。学校で育てていたカボチャが、大雨で川の水が流れてきて、しんすいひがいにあい、くさつてしまったからです。

三つ目は、野さいのまわりには虫がいっぱいいることです。なんで虫がいっぱいいるのかわかりませんがよそうはあります。虫が野さいのえいようをすいとっているのかなと思います。虫たちは、野さいにえいようがあるので子どもを作ったり、すを作ったりしているのかなと思います。野さいにとって虫は、あまりよくないそんざいなのかなと思います。こんど、本を使って調べたいと思います。

次に野さいを育てるときは、さいごまで育てて食べられるよう手入れをしたいです。

大きくなったさつまいも

山都小学校 三年 齋藤 幹椰

わたしは、五月にさつまいものなえを植えました。三年生になって、農業科の学習が始まり、畑に行くのをずっと楽しみにまわっていました。なえの植え方を教えて下さったのは、作物作りのプロの方です。さいしよに、ひ料を土にまき、畑をくわでたがやしました。次にマルチをかけ、なえをななめに植えました。

夏休みの宿題で畑の草むしりが出ました。太陽がじりじりとあつい中、さつまいもの葉が、大きくなっていました。つるもぐんとのびていました。「いも、すごい強い。」

十月、さつまいもをしゅうかくする時がきました。一輪車をおして、みんなで畑に行きました。はじめにつるをみんなで、

「パワー。」

と言いなながら、一生けん命に取りました。次に土に食いこんでいるマルチを力いっぱい引っぱりました。大きなさつまいももマルチといっしよに出てきました。みんなが

「うおお。さつまいもだあ。」

と言いなながら、次のさつまいもをほろうとすると、先生が

「全部、マルチを取ってからにしない。」

と言いました。みんなほりたくて、うずうずしていました。そして、とうとう全部のマルチが土から、はがされました。

「やったあ。ほるぞお。」

みんな、いっせいに土をほりました。三十センチぐらいのいもが出てきました。どんどんほると、たくさんいもが出てきました。

「ここほれ、わんわん。」

と言いながらほりました。四十センチぐらいのいもも出てきて、赤ちゃんみたいです。もういっぱいいいいで一輪車もパンパンです。学校からすけつとに用む員のおじさんが来しました。「助かったあ。」全部のさつまいもをほって学校に運べてよかったと思いました。来年も色々なものを育てたいです。

家に持ち帰った大きなさつまいもは、お母さんの手でチップスになりました。

令和4年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】

(敬称略)

関東学院大学工学部 教授
喜多方市教育委員会 教育長

佐藤 幸也
佐川 正人

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所 経営支援課長
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主査
会津よつば農業協同組合喜多方営農経済センター 営農振興課長
喜多方市小学校農業科支援員
喜多方市産業部農業振興課長

飯野 淳
長谷川 優子
遠藤 敦史
宮下 貴明
菅井 大輔
大場 悟

【事務局】

喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 農業科活動推進員

中野 富全
鈴木 亮
相良 悠果



令和4年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

令和5年3月 発行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会

